

ふと、断捨離の中から

ある日、私は実家の天井裏の物置を片付けていた。8年前に亡くなった父親が主に管理していた、いわゆる開かずの間である。兎に角すべての物を無くそうと思い、せっせとねじり鉢巻き（実はスカーフ、気持ちは鉢巻き絞り）をして、マスク、防護服（実は割烹着）で、完全防備し、断捨離に精を出した。

冠婚葬祭の引き出物、祖父母の紋付袴が入った箆笥、大昔使っていたてっしゅ（小皿の事）やお茶碗、その上に未使用の食器類もたくさん出てきた。花瓶やお抹茶茶碗を見つけると、もしやお宝ではと胸を躍らせた。また、かわいらしい絵柄の黄色の幼稚園バックとピンク色の水筒が出てきた。その他にも中学校、高校時代の教科書が二人分（私は双子である）、しっかりと麻ひもで結わえられていた。また信心深かった祖父の仏教学書が、木の箱にびっしりと詰められていた。読んでみたい衝動に駆られたがその気持ちは振り切った。

どんどん手を進めていると一枚の写真票と記された18歳の父の顔写真付き身分証明書に目が止まる。昭和13年11月19日鉄道省発行の徴兵の際に発行されたものだろう。学生服に丸刈り頭、少々あどけなさが残り、何かに怯え、悲しそうな目をしている。それとともに5歳上の兄の戦地から届けられた一枚の絵ハガキがあった。「弟よ、、、」で始まり、絵入りの面いっぱい、また表書きの方にも文面は続いた。草書体でさらさらと達筆すぎる文面は読み取りずらかったが、次男の父に、残された両親と4人の妹弟のことをよろしく頼むと言う内容であった。私は解読しているうちに、うっうとむせび泣いてしまった。手は止まるし、はりきり顔がくしゃくしゃになった。それから巨大な長もちに入った布団の底から、一枚の布切れが出てきた。広げると、古いアルバムの記憶にあった、赤紙が届きよいよ出征する日に、家の玄関前で記念撮影した際に掲げられていた垂れ幕であった。祖母は、息子の忘れ形見でもあるが、きっと、過去を封じ込めたくて、隠し持っていたのだろうか。その切なさに、再び私は涙のツボにはいり、涙の臺があふれかえってしまった。

父は、兄や沢山の戦友たちが、わずか18歳から25歳までの短い生涯を、胸をさされるようなやりきれない思いで終えて行ったこと、生きてくても生きられなかった彼らの気持ちを想うと、生きて帰れた自分は、どんなことがあろうとも、彼らの分まで生きていかねばならないと事あるごとに私たちを戒めてくれていた。陸軍曹長だった、父の兄は、ニューゲニア島山林のテントにて、忘れ物をした部下の代わりにテントに戻った時に銃弾の音とともに帰らぬ人となったことを祖母から聞かされていた。何とか遺骨の一本だけでも拾いにいきたいと願っていた彼女の気持ちは計り知れず、胸がずしんと押しつぶされそうになった。

かつて、この場に居た家人は皆いなくなったが、戦争の残骸は、永遠に人々の心に奥深い哀しみを眠らせていて、時折呼び戻し、二度と繰り返してはいけないよと優しい気持ちも思い出させてくれたのだろう。さて、この品々はどうしたものか。今年8月15日に100歳を迎えただろう父に尋ねてみよう。

会員 心諦（小池芙美子）

NPO 法人 みどりの風 事務局



〒930-0143 富山市丸の内2丁目3-8 ほんだクリニック内

TEL : 076-471-5597 FAX : 076-420-5188 E-mail : info@midori-no-kaze.com

HP : <http://www.midori-no-kaze.com/>

携帯サイト(講座情報のみ) : <http://k2.fc2.com/cgi-bin/hp.cgi/midorikouza/>

講座の内容をご紹介します！

第139回 2021年1月17日開講

「対人的困難について考える」

本田 徹先生

人は人に疲れ、人は人に傷つきます。私たちは様々な「辛さ・大変さ」を背負いながら生きていて、その「辛さ・大変さ」は対人関係からやってくると同時に対人関係によって軽減されています。対人的困難は私たちの支えとなるべき人との齟齬(食い違い)きたしている状態であり、とても過酷なことです。そのうまくいかない状況であっても、自分を否定せず、元気と喜びを生み出すことをかすかな頼りとして生きてゆきましょう。

本田先生からエールをいただいた講座でした。

第140回 2021年2月21日開講

「どんな時代でも自分として生きて

いこう！-まわりに振り回されない

生き方もあるよ-

高井 道雄先生

自分の軸をハッキリさせて、時代に飲み込まれないように生きるためには？時間は有限をいつも意識すること、今はいろいろなものが大きく変わる時代であること、自分を見つめなおして、自分の大切なものに集中して生きていくことなど振り回されない生き方をワークと講義で考えた講座でした。

今日から振り回されない生き方を実践！

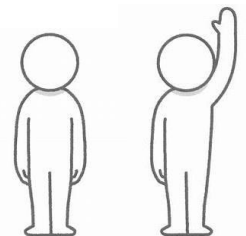
第141回 2021年3月21日開講

「自殺論から探る生きづらさとの付き合い方」

立瀬 剛志先生

社会的な生きものである私たちがどのような状況で生きづらさを抱くのかについて考える講座でした。ここ最近特に、自死という生きづらさを象徴する現象は日本の特徴を表す言葉となっています。生きやすい社会を目指して！

「急ぎなければ独りで行くといい、遠くまでいきたければ、一緒に行くことだ」立瀬先生からのメッセージです。



折々の言葉

「お部屋の整理は心の整理」

心を整理すると言っても、一朝一夕には上手くゆきません。確かに外観より心が大事というのは真実なのですが、時に手の付けられないほどぐちゃぐちゃになった心が、部屋を綺麗にすることで整ってゆくというのも古今東西、私たちに受け継がれてきた経験的事実なのです。(第141回講座案内2021年3月に掲載)

「よく踊る兵士がよく戦う」

太平洋戦争の敗戦が私たちに残した最良の遺産は、とも角戦争だけはしてはいけないという教訓だったというのが私の思いです。兵士とか戦うという言葉に、幾分か抵抗が無いわけではないですが、ベトナム戦争の時、アメリカ軍の圧倒的な重火器に対してねばりつづけ、最後には勝利した、ベトナム兵たちのこのことわざがいつまでも私の心に残りました。頑張るためには、あるいは働けるためには、まず遊ぶ力、楽しめる力が必要、今の私はそんな意味としてこの言葉をリフレーンしています。(第142回講座案内2021年4月に掲載)

本田先生の一コラム「折々の言葉」を2021年3月より講座案内に掲載しています。